

## 延年転寿の思想史―特に浄土教をめぐって―

小川 法道

はじめに

大乘仏教における業思想は空思想の影響から、業報を軽減することや自己の善根功德を他者に振り向ける廻向等の思想へと変容していくと指摘されている。浄土教においてもそのような空思想の影響を受け、業報思想は無視されることはないが、業の原則は緩和されるのである。では浄土教において業思想はどのように受容されていたのだろうか。そこで浄土教の諸師がどのように業の超克の道筋をつけてきたのか、について注目したい。浄土教には往生浄土という当益の他に現益として「転重軽受」や「延年転寿」の思想がある。「転重軽受」は業報を軽減するはたらきがあり、不定業であるから転ずることができる<sup>(1)</sup>とし、「延年転寿」は自己の力または仏の加護によって、この世における寿命を延ばすはたらきがある。両者は業思想と関連の深い思想であり、浄土教の中で業思想がどのように変遷したかを知る手がかりとなり得る。この「延年転寿」については仏教の教義的方面と、中国思想的方面からの考察を要する。そうした問題領域の中で仏典には「延年転寿」と類似した「延年益寿」という語が見られるが、この「転」と「益」の語の相違の背景についても考察を加えたい。

仏教における寿命とその変容

まず「延年転寿」の思想を見るにあたって、仏教において寿命がどのようなにとらえられているのかについて見ておくことにする。部派仏教教義書の中で最も多く現存する説一切有部の教義では、「命根」と「寿」を同義語とする。その命根は基本的に前生の生を終えた時、次生に結生させるはたらきがあり、そして生を得たのちは死有まで、その生を維持し続けるものである。そして寿は煖（体温）と識とを維持するはたらきをもっていて、実体をもつ法であると考えられている。また経部は種子説をとるために実体としての寿は認めないが、寿は同様のはたらきを持つと考えられている。また命根は過去の業（引業）によって現生に引かれ、そして現生においても命根はその過去業に依って転起する。換言すれば、現生の命根は過去業によってその期間が決められるといえる。<sup>(2)</sup>つまり仏教において寿命とは、過去世の業因によって決まった異熟果のことをいう。

このことを踏まえた上で寿命に関する「延年転寿」がどのように変遷してきたかを思想的にたどっていくこととする。すでに望月信亨氏によって「延年転寿」の思想は『阿毘達磨発智論』（以下『発智論』と略す）巻第一二一、『阿毘達磨俱舍論』（以下『俱舍論』と略す）巻第三に出ると指摘されている。<sup>(3)</sup>ここでは「延年転寿」という語は用いられないが、仏が寿命を延ばすことのできる留多寿行や寿命を短くすることができると捨多寿行を説き、次のように述べている。

云何苾芻留多壽行。答謂、阿羅漢成就神通、得心自在。若於僧衆、若別人所、以衣、以鉢、或以隨一沙門命緣

衆具布施、施已發願、即入邊際第四靜慮、從定起已、心念口言、諸我能感富異熟業、願此轉招壽異熟果。時彼能招富異熟業、則轉能招壽異熟果。

云何必芻捨多壽行。答謂、阿羅漢成就神通、得心自在。如前布施、施已發願、即入邊際第四靜慮、從定起已、心念口言、諸我能感壽異熟業、願此轉招富異熟果。時彼能招壽異熟業、則轉能招富異熟果。<sup>1)</sup>

ここではどうして比丘の寿命を多く留めることができる(留多寿行)のかという問いに対して、阿羅漢であれば神通力を成就して心の自在を得ているので、僧の集団や個人に対して、命を存続させる衣や鉢等の物を布施し、寿行を続け保つことを願って辺際静慮の禪定に入つて、その禪定から出た後に「私がこの世で得られる富の異熟業を転じて、寿の異熟果を招いてください」と心で念じ、かつ口でも表明することによって寿命を留めることができる<sup>2)</sup>と答える。またどうして比丘の寿命を多く捨てることができる(捨多寿行)のかという問いに対しては、先の留多寿行と同様に、辺際静慮の禪定に入つて、その禪定から出た後に「私がこの世で得られる寿の異熟業を転じて、富の異熟果を招いてください」と心で念じ、かつ口で表明することによって寿命を短くすることができると答える。

つまり阿羅漢や仏の位にあれば、自己の定力と願力によつて富を感じる業を転じて、寿の異熟を感じる業へと転換することができ、寿命の長短を自在に操ることができるのである。ここでは寿と富は対比関係で捉えられている。

以上留捨寿行について概観した。「留捨寿行」の思想が「延年転寿」の思想へと変遷してきたことは望月氏の指摘する通りである。<sup>3)</sup>以下、望月氏の論を踏まえながらこの問題を整理していく。仏教が中国に入つてから土着の思想である道教の増寿益算の思想に影響され、偽経といわれる多数の経典が編纂されるようになる。『仏説延寿経』や『続命経』、『仏説益算経』などがその代表例である。<sup>4)</sup>その中、劉宋元嘉四(四二七)年、智顛(三五〇—四二

七)と宝雲(三七二または三七六一四四九)の訳と伝えられる『四天王経』にも道教の影響を受けた形跡が見られ、寿命の長短が決まることについて次のように述べている。

佛告諸弟子。慎爾心念、無愛六欲、激情去垢、無求爲首。内以清淨、外當盡孝。…(中略)…壽命猶電、恍惚即滅。齋日責心慎身守口。諸天齋日伺人善惡。須彌山上即第二切利天、天帝名因。福德巍巍典主四天。四天王因四鎮王也。各理一方、常以月八日遣使者下、案行天下、伺察帝王臣民龍鬼蜎蜚蚊行蠕動之類心念口言身行善惡。十四日遣太子下、十五日四天王自下、二十三日使者復下、二十九日太子復下、三十日四王復自下。四王下者、日月五星二十八宿、其中諸天僉然俱下。四王命曰、勤伺衆生施行吉凶。若於斯日歸佛歸法歸比丘僧、清心守齋、布施貧乏、持戒忍辱精進禪定、翫經散説開化盲冥、孝順二親、奉事三尊、稽首受法、行四等心、慈育衆生者、具分別之以啓帝釋。若多修德精進不怠、釋及輔臣三十三人、僉然俱喜。釋勅伺命增壽益算<sup>7)</sup>。

ここでは仏は諸々の弟子に対し、心念を慎んで六欲に流されずに、情を激ぎ、煩惱の垢を除去することによって対象を求めることが無いことを第一とし、内心を清浄にして外に向かつては孝を尽くすべきであるという。そして寿命は稲光のように恍惚としてすぐに滅するから、齋日には心を責めて身を慎み、口を守る必要があるとする。四天王等の諸天は齋日に人の善惡を伺察し、その四天王はそれぞれ一方角を任され、常に月の八日に使者とともに天界より下つて案行し、その国の王や臣民、龍や鬼、蜎蜚、蚊行、蠕動の類の心の思いや口で言ったこと、身の行いの善惡を伺察する。同じように一四・二九日には太子とともに、一五・三〇日には四天王自らが、二三日には使者とともに伺察するのである。四天王は衆生の吉凶の行いを伺察し、この日の内に三宝に帰依し、心を清らかにし、

齋戒を守り、貧しい人に布施し、持戒・忍辱・精進・禪定を修し、経を読んで盲冥な者を教化し、親に孝行をし、三尊を奉事し稽首し法を受け、四無量心を行じ、衆生を慈しみ育んだ者を考慮して、多く徳を修し精進する者を帝釈天に報告して、その者の寿命を増やす（増寿益算）のである。

つまり四天王等が衆生の教化を行い、その衆生がこの日の内に仏道修行を修したならば寿命を増やすことができるとしている。この増寿益算の思想については、道教の代表的な著『抱朴子』（三一七年撰述）内篇第六微旨の影響を受けているという。その箇所を示すと次のようになる。

或曰、敢問欲修長生之道、何所禁忌。抱朴子曰、禁忌之至急、在不傷不損而已。按易内戒及赤松子經及河圖記命符皆云、天地有司過之神、隨人所犯輕重、以奪其算、算減則人貧耗疾病、屢逢憂患、算盡則人死、諸應奪算者有數百事、不可具論。又言身中三尸、三尸之爲物、雖無形而實魂靈鬼神之屬也。欲使人早死、此尸當得作鬼、自放縱遊行、享人祭醑。是以每到庚申之日、輒上天白司命、道人所爲過失。又月晦之夜、竈神亦上天白人罪狀。大者奪紀。紀者、三百日也。小者奪算。算者、三日也。

ここでは長生の道を修める時にはならないことは何かということに関して、天地には過ちを司る神がいて、人の犯す罪の軽重に随ってその算（命数）を奪うという。算が減ると人は貧困や病気を起こして、たびたび心配事に遇い、算が尽きたら死ぬのである。また人の身中に三尸という虫がいて、三尸はその形がなく魂のようなものであり、人を早く死なせようとしている。そこで人が死ねばこの三尸は鬼（幽霊）となって、思いのままにあちこち行つて、人が祀つたものを食べるができるようになる。庚申の日になると天に上つて司命に人の犯した過失を

言い、また晦日の夜には、竈の神も天に上つて人の罪状を申す。罪が大きければ紀(三百日)の寿命を奪い、小さければ算(三日)の寿命を奪うのである。

このように『抱朴子』では天に報告された人の罪状によつて、神に寿命が奪われる奪算説を説いていて、その肯定的なものが先の『四天王経』に見る益算説なのである。それ故、この『四天王経』は中国の益算説の影響を受けたものと見ることが出来る。

また『抱朴子』内篇第六微旨には、寿命を延ばす機能を挙げていて、次のように述べている。

其有曾行諸惡事、後自改悔者、若曾枉煞人、則當思救濟應死之人以解之。若妄取人財物、則當思施與貧困以解之。若以罪加人、則當思薦達賢人以解之。皆一倍於所爲、則可便受吉利、轉禍爲福之道也。能盡不犯之、則必延年益壽、學道速成也。<sup>10)</sup>

ここではかつて悪事を行った者が後に悔い改めようとするには、どのようにすればよいのかということに関して、無実の罪の人を殺した者は死ぬべき人を救済することで罪を消すように心がけよという。また妄りに財物を盗んだ者は貧困に悩む者に施しをすることで罪を消すように心がけ、不当な罪を与えたことがある者は賢人を推薦し栄達させることで罪を消すように心がけよという。このように犯した罪の二倍の善を行えば、良い利益を得ることができ、これを「禍を転じて福と為す」という。そして二度と同じ罪を犯さなければ、必ず寿命を延ばすこと(延年益寿)ができ、仙道の修行を速やかに成就することができると説いている。

このように奪算説にもとづいて罪過を改悔して、罪過の二倍の善を行うことによつて禍を転じて福と為し、加え

て寿命を延ばすことを『抱朴子』では「延年益寿」と表現しているのである。<sup>11)</sup>

### 大乘諸経論に見える延年の思想史

そもそも不老長寿を望むのは人の世の常と思われるが、その中でも特に顕著なのが中国の場合であろう。そのことはサンスクリットで Amitābha を「無量光」と訳すべき所を「無量寿」と訳していることから窺える。また北魏時代の仏教では「長命老寿」を願って亡き母の為に無量寿仏像を造立する者や、釈迦・弥勒の像を造立することによって自身の長寿を願う者がいたことが銘文からも読み取れる。<sup>12)</sup>

このように中国では不老長寿を願う神仙思想が見られるが、大乘仏教においては「増寿」・「益寿」・「転寿」等の語によって寿命の延ばす機能を表現している。以下、大乘仏教における寿命を延ばす機能を見て、「延年転寿」の思想を説明する手がかりとしたい。

まず『無量寿経』の説示について見ていきたい。康僧鑑訳として伝わる『無量寿経』巻下のいわゆる「三毒段」では、次のように述べている。

人能自度、轉相拯濟、精明求願積累善本、雖一世勤苦須臾之間、後生無量壽佛國、快樂無極。長與道德合明、永拔生死根本。無復貪恚愚癡苦惱之患。欲壽一劫、百劫、千億萬劫、自在隨意皆可得之。<sup>13)</sup>

ここは娑婆世界を厭い離れることを望み、自らの身口意の三業を整え、善行を修すべきであると述べた後の一説

である。要約すると、他人を濟度するためにはまず自らを整え、それから他人を濟度しようとする。願って善根を積むならば、たとえ現生のみを精進であつても、次生には極楽世界に往生する。そしてさとり徳を身につけ、永劫に生死輪廻の根本から離れ、貪欲・瞋恚・愚痴の三毒の苦しみがなくなり、心の願うままに寿命を一劫・百劫・千万億劫の寿命を増やすことができるという。この『無量寿経』の説示では寿命を増やすことを述べてはいるが、寿命が延びるのは往生後のことであり、現生で寿命が延びる訳ではない<sup>(14)</sup>。

次に鳩摩羅什訳『大智度論』（四〇二—四〇五年訳出）巻第一七では、次のように述べている。

復次諸禪中有頂禪。何以故名頂。有二種。阿羅漢壞法、不壞法。不壞法阿羅漢、於一切深禪定得自在、能起頂禪。得是頂禪、能轉壽爲富、轉富爲壽<sup>(15)</sup>。

ここでは諸々の禪定の中に「頂禪<sup>(16)</sup>」という行位があるが、どうして「頂」というのかについては二種を挙げる。それは阿羅漢の壞法と不壞法である。この不壞法つまり涅槃の境地に入った阿羅漢は、一切の深き禪定において自在を得ているために頂禪（最高の禪）を起こすことができ、この頂禪を得たならば寿を転じて富となすことができ、また富を転じて寿となすことができるという。このような『大智度論』の思想は「留捨寿行」に見えた思想と一致し、現生の寿命の長短を自在に操ることができるのである。またこの寿命の業を転換することから「転寿」と表現され、経論の中では『阿毘達磨大毘婆沙論』（以下『婆沙論』と略す）と『大智度論』にしか見えない語である。次に『大智度論』と同じ訳者の鳩摩羅什訳『妙法蓮華経』（四〇六年訳出）巻第六「常不輕菩薩品」では次のように述べている。



是比丘臨欲終時、於虛空中、具聞威音王佛先所說法華經二十千萬億偈、悉能受持、即得如上眼根清淨、耳、鼻、舌、身、意根清淨。得是六根清淨已、更增壽命二百萬億那由他歲、廣爲人說是法華經。<sup>17</sup>

ここでは常不輕菩薩（是比丘）が臨終の時に、虚空の中で威音王仏が説かれた『法華經』の二十千万億の偈を聞き、すべての偈を受持したことによつて六根の清淨を得た。この六根清淨を得たことによつて更に二百萬億那由他歳の壽命を増すと説いている。それは長い間、衆生に『法華經』を知らせるためであるという。つまり經典受持による菩薩の利他の精神が説かれている。

次に曇無讖訳『大般涅槃經』（四一六—四二三年訳出、以下『涅槃經』と略す）卷第三六「迦葉菩薩品」では次のように述べている。

迦葉菩薩言、世尊、若有因則有果。若無因則無果。涅槃名果、常故無因。若無因者、云何名果。而是涅槃亦名沙門、名沙門果。云何沙門、云何沙門果。善男子、一切世間有七種果。一者方便果、二者報恩果、三者親近果、四者餘殘果、五者平等果、六者果報果、七者遠離果。∴（中略）∴餘殘果者、如因不殺、得第三身延年益壽。是名殘果。如是果者、有二種因。一者近因、二者遠因。近者、即是身口意淨。遠者、即是延年益壽。是名殘果。<sup>18</sup>

ここでは一切世間には方便・報恩・親近・余残・平等・果報・遠離の七種の果報があるという。その四つ目の余残の果報というのは、不殺生の功德によつて第三身つまり次生の延年益壽を得るとする。その余残の果報に近因と遠因の二種類があつて、近因は身口意の清淨を得、遠因は延年益壽を得るのである。この不殺生の功德によつて次

生の寿命が延びるといふのは他の仏典にも見られる思想であるが、『涅槃經』では「延年益寿」で表現されている。また『涅槃經』と同じ曇無讖の訳『大方等大集經』（四一四—四二六年訳出、以下『大集經』と略す）卷第三二「日密分」では、次のように述べている。

善男子、是惡衆生、聞是呪已、於生死法而生悔心、離三惡道、修集信根乃至慧根、亦樂修行六波羅蜜清淨梵行、增壽益算、除惡病苦、智慧熾盛、親厚無損、一切善法無有耗減、具足成就十善之法、長益三寶、樂修行法、令諸衆生具足如是無量善法。<sup>19)</sup>

ここでは五逆罪や誹謗正法を犯した悪衆生でも、陀羅尼の呪を聞いたならば、生死の間に懺悔する心が生じ、三悪道を離れ、解脱に至るための五つの力である信根・精進根・念根・定根・慧根を修し、また六波羅蜜と清淨の梵行を修行して、寿を増し算を益し、悪病の苦しみを除くという。さらに陀羅尼には智慧を熾盛し、親切で損なうことなく、あらゆる善法を減らすことがなく、十善の法を具足し成就し、後世まで三宝を饒益し、願って仏道修行をして、諸々の衆生にこのような善法を具足させる功能がある。このように陀羅尼を聞くことによつてさまざまな功能が得られ、その一つとして増壽益算つまり寿命を延ばすことができるのである。他にも『大集經』のように「陀羅尼」を聞くこと、もしくは唱える等の陀羅尼を説く經典には多く寿命を延ばす思想が見られる。<sup>20)</sup>

次に仏駄跋陀羅訳『大方広仏華嚴經』（六十華嚴、四一八—四二〇年訳出、以下『華嚴經』と略す）卷第一八「金剛幢菩薩十廻向品」の十廻向中第六「随順平等善根廻向」を述べる中で、次のように述べている。

菩薩摩訶薩、以不殺等五戒善根、迴向衆生、令一切衆生得長壽慧、具菩提心、命根無量。令一切衆生得無量壽、恭敬供養一切諸佛。令一切衆生具足修習離老死法、一切衆難不能害命。令一切衆生速得無量離病苦身、命根自在能隨意住。令一切衆生得無盡命、盡未來劫悉具修習菩薩所行、調伏化度一切衆生。令一切衆生得淨命門、十力善根皆悉來入。令一切衆生善根具足、壽命無量諸願成滿。令一切衆生悉見諸佛、修習無盡長壽善根。令一切衆生於如來家學諸所學、具足成就無盡命根、於聖法中得歡喜心。令一切衆生得無老病不死命根、無盡精進安住佛智。是爲菩薩摩訶薩、以離殺等五戒善根、迴向衆生、令一切衆生安住如來三種淨戒具足、究竟十力智慧。<sup>21</sup>

ここでは菩薩が不殺生等の五戒の善根を衆生に迴向することを述べている。この迴向によつてあらゆる衆生が長寿の智慧を得、菩提心を具え、命根を無量にさせることを願う。また他にも迴向することによつて衆生に諸仏を恭敬し供養させること、老死を離れる法を修習してあらゆる災難でも命を害されないこと、無量の病気の苦しみから離れる身を体得して命根を自在に操つて意のままにとどめさせること、無尽の命を得て未來劫にわたつて悉く菩薩の行を修習し衆生を調べ静めて導き救わせること、清浄な生活を得て十力の善根を持たせること、あらゆる善根を具足し寿命無量にして諸々の誓願を成就させること、諸仏を見て無尽長寿の善根を修習させること、如來の家に於いて実践修行し無尽の命根を具足し成就して仏の教えの中で歡喜心を得させること、老病が無い不死の命根を得て無尽の精進によつて仏の智慧を安住にさせることを願う。菩薩はこのような不殺生等の五戒の善根の迴向によつて衆生に如來の三種淨戒に安住し具足して十力の智慧を極めさせるのである。このように『華嚴經』では不殺生の功德を迴向することによつて、さまざまな功德、特に寿命を延ばす功德が得られるように願われている。つまり菩薩道の上に不殺生と寿命との関連が説かれている。

以上、大乘経論に説かれる寿命について若干の考察を加えてみた。大乘経論では利他行や頂禪といわれる禪定、不殺生、陀羅尼、不殺生の功德を廻向する等のさまざまな行によつて寿命を延ばすことができる」と説いている。特にあらゆる戒の冒頭に置かれる慈心による不殺生と寿命との関連付けが見られるのである。

中国浄土教に見える延年転寿の思想

では浄土教において、「延年転寿」の思想がどのように受容されているのかについて見ていきたい。道綽禪師（五六二—六四五、以下敬称を略す）の『安樂集』第四大門、「第三に問答解釈して念仏する者、種々の功能利益を得ること不可思議なることを顕す」中の第三問答において、寿命を延ばす功德について次のように述べている。

第三、問曰、念佛三昧既能除障、得福功利大者、未審亦能資益行者、使延年益壽以不。答曰、必得。何者、如惟無三昧經云、有兄弟二人、兄信因果、弟無信心。而能善解相法。因其鏡中自見三面上死相已現、不<sub>レ</sub>過<sub>二</sub>七日<sub>一</sub>。時有智者、教往問<sub>レ</sub>佛。佛時報言、七日不<sub>レ</sub>虛。若能一心念佛、修<sub>レ</sub>戒、或得<sub>レ</sub>度<sub>レ</sub>難。尋即依<sub>レ</sub>教繫念。時至<sub>二</sub>六日<sub>一</sub>即有<sub>二</sub>三鬼<sub>一</sub>來。耳聞<sub>二</sub>其念佛之聲<sub>一</sub>、竟無<sub>二</sub>能前進<sub>一</sub>。還告<sub>二</sub>閻羅王<sub>一</sub>。閻羅王索<sub>レ</sub>符。已注云、由<sub>二</sub>持戒念佛功德<sub>一</sub>、生<sub>二</sub>第三<sub>一</sub>天。

ここでは念仏三昧は障礙を除いて福德を得ることが大きいということに関して、念仏三昧が何故に行者を資益して年を延べ、寿を益させること（延年益寿）ができるのかという疑問を出し、必ず寿命を延ばすことができる所以

を二つの經典から証明しようとする。一つは『惟無三昧經』によるものである。内容は兄弟二人がいて兄は因果を信じているが、弟は因果を信じない。ただ占いに通じていた。ある日弟は鏡で自分を見ると死相が出ていて七日以内に死ぬだろうと予感した。その時に智者に出会い、仏にどうしたらよいのか聞くように言われ、問うと仏は七日で死ぬことは間違いないとし、一心に仏を念じ、戒を修すならば、この危難から救われると答えた。よつて弟は一心に仏を念じた。六日過ぎた頃、二人の鬼がやって来たが、耳で念仏の声を聞いたために弟のもとへ行くことが出来なかつた。鬼たちは帰つて閻魔王にそのことを告げると、閻魔王はその弟の符を探し「持戒念仏の功德によつて第三の炎天に生じる」と書かれていたという。

この『安樂集』記述では、第三の炎天に生じることが述べられているだけであつて、寿命が延びたかどうかは分からないが、鬼が近づくことができず命を奪われていないことから考えると、念仏三昧には命を延ばす功德があるといえる。<sup>(23)</sup> また道綽は今一つの經典を挙げて、次のように述べている。

又譬喻經中、有<sup>二</sup>一長者、不信<sup>レ</sup>罪福、年已五十。忽夜夢見、刹鬼索<sup>レ</sup>符、來欲<sup>レ</sup>取<sup>レ</sup>之。不<sup>レ</sup>過<sup>二</sup>十日、其人眠覺、惶怖<sup>スル</sup>、非常。至<sup>レ</sup>明求<sup>レ</sup>覓相師<sup>ヲ</sup>占<sup>シ</sup>夢。師作<sup>レ</sup>卦兆云、有<sup>二</sup>刹鬼<sup>一</sup>必欲<sup>レ</sup>相害。不<sup>レ</sup>過<sup>二</sup>十日、其人惶怖倍<sup>ス</sup>常、詣<sup>レ</sup>佛求<sup>レ</sup>請。佛時報云、若欲<sup>レ</sup>攘<sup>レ</sup>此、從<sup>レ</sup>今已去、專<sup>レ</sup>意念<sup>レ</sup>佛、持<sup>レ</sup>戒、燒<sup>レ</sup>香、然<sup>レ</sup>燈、懸<sup>レ</sup>繒幡蓋、信<sup>二</sup>向<sup>三</sup>三寶、可<sup>レ</sup>免<sup>二</sup>此死<sup>一</sup>。即依<sup>レ</sup>此法、專心信向。刹鬼到<sup>レ</sup>門、見<sup>レ</sup>修<sup>レ</sup>功德、遂不<sup>レ</sup>能<sup>レ</sup>害、鬼即走去。其人緣<sup>レ</sup>斯功德、壽滿<sup>二</sup>百年、死得<sup>レ</sup>生<sup>二</sup>天。復有<sup>二</sup>一長者、名曰<sup>三</sup>執持<sup>一</sup>。退<sup>レ</sup>戒還<sup>レ</sup>佛、現被<sup>二</sup>惡鬼打<sup>レ</sup>之。<sup>(24)</sup>

ここで道綽は『譬喻經』<sup>(25)</sup>を挙げて「延年益寿」を明かすのである。この經では一人の長者が罪福を信じないまま

五十歳になったが、夢で鬼が自分の符を取ろうとしているのを見た。その符には余命十日と記されていて、恐怖を覚え、占い師にこの夢について占ってもらおうと、十日以内に必ず鬼に殺されると言われる。その長者はさらに恐怖が増すこととなり、助かる方法を求めて仏を訪ねた。仏はもしこの鬼を払いたいのならば、今からひたすらに仏を念じ、戒を持ち、香を焚いて灯明を灯し、絹で作られた幡蓋をかけ、三宝を信じたならば、この死を免れることができるかと教える。長者はそれによって精進したことで、鬼に殺されることから免れる。その長者はこの功德によって百歳まで生きることができ、死んで天に往生したという。また別の話では、執持という名前の長者がいたが、彼は戒を持つのをやめて仏から離れたために鬼に殺されたという。

ここでは念仏・持戒・焼香・燃灯・懸繪幡蓋・信向三宝という条件を満たせば、鬼による死から免れ、さらに五十年の寿命を延ばすことができると説いている。しかし戒を持つことをやめれば鬼に殺されるとも説く。道綽は『惟無三昧経』という疑偽経典の引用や、『譬喩経』のような教化的に平易な内容の経典を使うことによって、民間信仰に密接している事柄を踏まえて、念仏三昧を行ずる者が「延年益寿」という現益を得ることを示したのである。<sup>(26)</sup> またこの二つの経典に共通するものとして「念仏」・「持戒」が挙げられる。ただ延年益寿を明かす「念仏」に関して、道綽は阿弥陀仏に限定している訳ではない。また「持戒」を挙げるのは、先の大乗経論にも見られた不殺生の功德によって寿命を延ばすことから展開してきたと考えられる。

次に善導大師（六一三—六八一、以下敬称を略す）が「延年転寿」について、どのように考えたかについて考察していく。善導の『観念阿弥陀仏相海三昧功德法門』（以下『観念法門』と略す）には六種の往生経（『無量寿経』・『観経』・『阿弥陀経』・『般舟三昧経』・『十往生経』・『浄度三昧経』<sup>(27)</sup>）があることを示し、次のように述べている。

謹依<sup>テ</sup>釋迦佛教六部<sup>ノ</sup>往生經等、顯明稱念阿彌陀佛、願<sup>ス</sup>生<sup>ニ</sup>淨土<sup>ニ</sup>者、現生即得<sup>ニ</sup>延年轉壽<sup>、</sup>不<sup>レ</sup>遭<sup>ハ</sup>九橫<sup>ノ</sup>之難<sup>ニ</sup>。一<sup>ニ</sup>具<sup>ハ</sup>如<sup>シ</sup>下<sup>ノ</sup>五緣義中說<sup>一</sup>。

ここで釈尊は六種の往生を説く經典に依つて、阿彌陀仏を称念して極樂淨土に往生したいと願う者は現生で「延年轉壽」、すなわち壽命が延び、九種の横難<sup>(29)</sup>に遇わないことを説く。そして一々の内容については五種増上緣義の中で説くと述べている。善導はその五種増上緣の第二に「護念得長命増上緣」をあげて、護念され命が延びる緣を挙げている。この表現から護念増上緣には長命になることが含まれていることがわかる。その中で「延年轉壽」に關して次のように述べている。

又白<sup>ス</sup>諸行者<sup>、</sup>但欲<sup>ス</sup>今生日夜相續<sup>シテ</sup>專念<sup>シ</sup>彌陀佛<sup>、</sup>專誦<sup>シ</sup>彌陀經<sup>、</sup>稱揚禮讚<sup>シテ</sup>淨土聖衆莊嚴<sup>ヲ</sup>願生<sup>上</sup>者<sup>、</sup>日別誦經<sup>スル</sup>十五遍<sup>、</sup>二十<sup>、</sup>三十遍已上者<sup>、</sup>或誦<sup>ハ</sup>四十<sup>、</sup>五十<sup>、</sup>百遍已上者<sup>、</sup>願滿<sup>テ</sup>十萬遍<sup>、</sup>又稱揚禮讚<sup>シ</sup>彌陀淨土<sup>、</sup>依正二報莊嚴<sup>ヲ</sup>、又除<sup>レ</sup>入<sup>ニ</sup>三昧道場<sup>、</sup>日別念<sup>スル</sup>彌陀佛<sup>一</sup>萬<sup>、</sup>畢命相續<sup>スル</sup>者<sup>、</sup>即蒙<sup>テ</sup>彌陀加念<sup>ヲ</sup>、得<sup>レ</sup>除<sup>ニ</sup>罪障<sup>一</sup>。又蒙<sup>ト</sup>佛與<sup>ニ</sup>聖衆<sup>ニ</sup>常來護念<sup>スル</sup>、既蒙<sup>ニ</sup>護念<sup>ヲ</sup>、即得<sup>ニ</sup>延年轉壽長命安樂<sup>ヲ</sup>。因緣一<sup>ニ</sup>具<sup>ハ</sup>如<sup>シ</sup>譬喻經<sup>、</sup>惟無<sup>ニ</sup>三昧經<sup>、</sup>淨度<sup>ニ</sup>三昧經等說<sup>一</sup>。此亦是現生護念増上緣<sup>(30)</sup>。

ここでは今生で往生を願ひ、毎日『阿彌陀經』を誦すること十五・二十・三十・四十・五十・百遍以上と増やして十萬遍を満たし、また阿彌陀仏の淨土の依正二報の莊嚴を稱揚し礼拝し讚嘆して、毎日阿彌陀仏の名号を念じて一萬遍称えて、命終の時まで相續する者は阿彌陀仏の加念を蒙つて罪障を除くことができ、また仏と聖衆とがい

つも来迎して護念を蒙るといふ。この護念を蒙ることができたならば、「延年転寿」つまり長命となり安楽を得ることができるのである。このような因縁はそれぞれ『譬喩經』、『惟無三昧經』、『淨度三昧經』等に説いているといふ。

このように善導は『阿弥陀經』の読誦、淨土の依正二報の讚歎と禮拜、一万遍阿弥陀仏を念じるという、いわゆる五種正行を修することによって「延年転寿」することができる<sup>(31)</sup>と説く。善導はその教証として『安樂集』が引用した『惟無三昧經』、『譬喩經』を挙げ、さらに『淨度三昧經』を加えるのである。ここで「等」といふ語を持ち出すのは、先に説いた六種の往生經である『無量壽經』・『觀經』・『阿弥陀經』・『般舟三昧經』・『十往生經』・『淨度三昧經』も含めるからに他ならない。善導は道綽の影響を受け、『安樂集』と同じ經典を教証として使用するが、道綽の『安樂集』では「延年益寿」と表現されていたのを「延年転寿」と「益」から「転」へと変えるのである。

「延年益寿」といふ語は道教の『抱朴子』にも見え、大乘『涅槃經』等にも見える。道綽は淨土教に帰入する以前は『涅槃經』の研鑽につとめ、『涅槃經』を二四遍も講説したといふ<sup>(32)</sup>。また道綽の『安樂集』は曇鸞の『往生論註』の影響を受けていて、その『往生論註』に『抱朴子』が引用されることから、道綽も『抱朴子』を見ていた可能性がある。このようなことから道綽の『安樂集』では、『抱朴子』や大乘『涅槃經』からこの「延年益寿」の語を使用したと想定でき、「延年益寿」の語は中国土着の道教思想を受けた語ということができ、それが中国仏教の中に取り入れられたといふことができる。それ故「延年益寿」の語は仏教教理的というよりむしろ中国思想的であるといえる。

ところで善導は道綽の「延年益寿」の語を「延年転寿」と変えるのである。この「転寿」の語は先に指摘した通り、經論では『大智度論』と『婆沙論』にしか見えない語である<sup>(34)</sup>。また善導以前には天台大師智顛（五三七―五九



七)の『妙法蓮華經文句』卷第十下と『釈禪波羅蜜次第法門』卷第十に「転寿」の語が見える。智顛は玄奘(六〇二—六六四)以前であることから、どちらも『大智度論』の影響を受けたものといえる。善導は玄奘訳の経論を使用しないことから、『大智度論』から「転寿」の語を取ってきたといえよう。その「転寿」は寿命の業を転換することを意味することから、「延年転寿」は仏教の転換という教理的内容を踏まえた語であるといえる。ではなぜこのように「延年転寿」の語を使用する必要があったのか。道綽は民間に受け取りやすい内容を示すために「延年益寿」の語を使用した。阿弥陀仏の功德力を強調する訳ではなかった。そのようなことから善導は仏教教理的な「延年転寿」という語を創出することによって、阿弥陀仏の仏力を強調したのである。それ故、善導が使う「延年転寿」の語は阿弥陀仏の仏力に限定されていると見ることができる。

#### 日本浄土教に見える延年転寿の思想

次に日本浄土教において「延年転寿」の思想がどのように受用されたのかについて見ていきたい。まず善導が説く「延年転寿」の思想は、南都浄土教者として知られる珍海(一〇九一—一一五二)の『決定往生集』巻下で次のように言及されている。

又此行者、於<sub>ニ</sub>現生<sub>中</sub>無<sub>シ</sub>諸障難。如<sub>キ</sub>感師<sub>明</sub>佛益<sub>云</sub>、現生<sub>即得</sub>延年轉壽<sub>不</sub>遭<sub>ニ</sub>九横<sub>之難</sub>。

ここでは念仏行者(此行者)は現生の中で諸々の障難を受けることはないとして、懷感禪師が念仏の仏益を明か

して「現生には延年転寿することができ、九横の危難に遭わぬ」と説く所をあげる。珍海は「延年転寿」を懐感禪師の説示としているが、実際は先に述べた善導の『観念法門』の説示を引用していることがわかる。

次に法然上人（一一三三—一二二二、以下敬称を略す）が「延年転寿」をどのように受容していたかについて触れてみる。法然は『選択本願念仏集』（以下『選択集』と略す）第一章私釈段で、先の善導の『観念法門』の説示を引用している。<sup>39</sup> また法然は寿命に関して『逆修説法』と「浄土宗略抄」と「念仏往生義」の中で言及している。まず『逆修説法』三七日で、法然は阿弥陀仏の「寿命の功德」について取り上げ、次のように述べている。

此娑婆世界人、以レ壽爲ニ第一ノ寶、…（中略）…一切衆生皆願ニ壽長ノ事ニ故也。…（中略）…誠知、諸佛功德以ニ壽命ニ爲ニ第一ノ功德、衆生之寶、以レ命爲ニ第一ノ寶ニ云事。夫得ニ壽長ノ果報者、與ニ衆生ノ飲食、又不レ殺ニ物ノ命ニ爲ニ業因ニ也。因與ニ果皆相應スルナレハ、食則續ニ命故、與ニ食則與ニ命也。持ニ不殺生戒ニ亦助ニ衆生ノ命ニ也。故以ニ飲食ニ施ニ與衆生ニ、住ニ慈悲ニ持ニ不殺生戒者、必得ニ長命ノ果報ニ也。<sup>40</sup>

ここではこの娑婆世界の人は寿命が第一の宝であると考え、一切衆生は長寿であることを願うという。また諸仏の功德も寿命を第一の功德とし、衆生にとつても寿命が第一の宝であると述べる。その中で衆生に飲食を与え、命を殺さないことを業因とすれば長寿の果報を得られるとする。その長寿の果報の業因を説明して、原因と結果とは相応することを明かして、食によつて命は存続することから食を与えることは命を与えることとなり、また不殺生戒を持つことも衆生の命を助けることとなる。よつて飲食を衆生に布施し、慈悲心を持ち続けて不殺生戒を持つてゐるならば必ず長命の果報を得るといふ。

このように法然は寿命を第一の宝であると示し、衆生が飲食を施すことや不殺生戒を持つことで寿命を延ばす業因となると説いている。ここでは阿弥陀仏の力を持ち出さないものの、慈心による不殺生と寿命の関係や、飲食の布施による寿命との関係が説かれている。

次に「浄土宗略抄」では寿命を延ばすことに関して次のように述べている。

又宿業かきりありて、うくへからんやまひは、いかなるもろくのほとけかみにいゝるとも、それによるましき事也。いのるによりてやまひもやみ、いのちものふる事あらは、たれかは一人としてやみしぬる人あらん。いはんや又佛の御ちからは、：（中略）：われらが悪業深重なるを滅して極樂に往生する程の大事をすらとけさせ給ふ。ましてこのよいか程ならぬいのちをのへ、やまひをたすくるちからましまさゝらんやと申事也。されは後生をいのり、本願をたのむ心もうすき人は、かくのことく圍繞にも護念にもあつかる事なしとこそ善導はの給ひたれ。

ここでは祈ることによって病氣も治り、寿命も延びることがあるならば誰一人として病氣になつたり、死んだりする人はいないであろうといい、法然は先ず人間の寿命には限界があることを示している。次に阿弥陀仏の力は悪業深重な罪を滅して往生させるといふ一大事を成し遂げさせることから、この世で寿命を延ばすことや病氣から助ける力もあると説いている。つまり法然は寿命の有限性を確認させた上で阿弥陀仏の願力を示し、その文脈の中で「延年転寿」の思想を持ち出しているのである。また「念仏往生義」では次のように述べている。

壽命の長短といひ、果報の深淺といひ、宿業にこたへたる事をしらすして、いたづらに佛神にいのらんよりも、一すちに彌陀をたのみてふた心なければ、不定業をは彌陀も轉し給へり、決定業をは來迎し給ふへし。无益のこの世をいのらんとて大事の後世をわするゝ事は、さらに本意にあらず、後生のために念佛を正定の業とすれば、これをさしをきて餘の行を修すへきにあらされは、一向專念なれとはすゝむる也。

ここでは壽命の長短や果報の淺深（輕重）は過去世の業因つまり宿業によって定まっていることを知らないで、無益に仏や神に祈るよりは、一筋に阿彌陀仏を頼んで二心なければ、阿彌陀仏は不定業ならば轉じ、決定業ならば來迎されるという。それ故無益にこの世を祈るよりも、後世のために往生という一大事を忘れてはならないという。ここでは壽命が延びるとは言つてはいないが、宿業によって定まった壽命でも、阿彌陀仏の力によって轉ずることができると説いている。

このように法然は壽命が第一の宝であるから、布施や持戒の精神を踏まえて飲食を施すことや不殺生戒を持つ必要性を説きながら、阿彌陀仏の力によつて現世で「延年轉壽」することができる機能を認めている。しかし壽命には限界があることを受け止めることが重要であるとし、往生淨土という目的を忘れてはならないとする。つまり延年轉壽に関する法然の姿勢は、乗り越えることの出来ない命の限界を自覚させながら、そこを轉機としてこの世で得られる現益を祈るよりは、無量壽の淨土への往生を一大事と受け止めることを説き勧めるところにある。

## おわりに

中国には古来不老長寿を願う思惟法がある。道教の代表的な著作『抱朴子』では、寿命の長短を左右する神が存  
在し、寿命が増える方を益算といい、逆に減る方を奪算という。その思想が仏教の中にも取り入れられ、『四天王  
経』等の經典が編纂されて来るのである。しかし仏教のアビダルマ思想も「留捨寿行」を説いて、仏あるいは阿羅  
漢の位の者ならば、寿命を自由に操ることができると説く。また大乘の『法華経』では、菩薩が衆生に『法華経』  
を広めるために寿命を延ばすことが説かれていて、そこには經典受持による菩薩の利他の精神が見える。また慈心  
による不殺生の功德は他者の寿命を延ばし、自己の寿命を延ばすこともできる。そこには大乘菩薩道の自他不二や  
自利利他の思想の上に不殺生と寿命を関連付ける説示が見られる。従って本論において提起した仏典に説かれる延  
年の思想は、一概に中国的なものとは決めつけることはできず、インドの仏教思想の中にも求められることが出来る  
のである。

また「益」と「転」の相違については、道綽は『抱朴子』や大乘『涅槃経』から「延年益寿」の語を使うが、そ  
れは仏教教理的というよりも中国的である。また善導は師の道綽の影響を受けつつも『大智度論』の「転寿」の語  
を使って「延年転寿」と表現し、行為の質的転換という仏教教理を踏まえた捉え方をするのである。

いまひとつ指摘できることは、善導が「延年転寿」へと表現を変えたのは、「延年益寿」の語がさまざまな典籍  
の中で使われ、しかもその典籍ごとに寿命を延ばす行為が異なっていることから、延年の根拠を阿弥陀仏一仏の願  
力に限定強調することにあつた点である。法然はそのような善導の思想を踏まえた上で「延年転寿」を認めるが、

この世で得られる現益を祈るよりは、命の有限性の自覚を転機として、無量寿の浄土への往生を所求とする一大事へと目を向けさせていくのである。また良忠が指摘する通り、念仏には護念の利益としてこの「延年転寿」の功德がおさまっているので、わざわざ現世の長寿を祈願しなくてもよいのである。<sup>(45)</sup>

註

- (1) 「転重軽受」については、拙稿「転重軽受の思想史―特に浄土教をめぐる―」（『佛教学会大学院紀要』文学研究科篇第四五号、二〇一七年）を参照されたい。また珍海は『決定往生集』巻下において「大乘に決定業無し」（『浄土宗全書』（以下『浄全』と略す）一五・四九七b）と述べて、大乘仏教には決定業がないと説いている。
- (2) 加藤宏道「アビダルマ仏教における生命観―命根の研究―」（『日本仏教学会年報』第五五号、一九九〇年）参照。
- (3) 『望月仏教大辞典』（世界聖典刊行協会、一九九三年）第一巻・三一五a―b参照。
- (4) 『発智論』巻第一二（『大正新脩大藏經』（以下『大正』と略す）二六・九八一a）、『俱舍論』巻第三（『大正』二九・一五b） また『婆沙論』巻第一二六（『大正』二七・六五六a―六五八a）、真諦訳『阿毘達磨俱舍釈論』巻第二二（『大正』二九・一七四c、以下『俱舍釈論』と略す）、櫻部建『俱舍論の研究 界・根品』（法蔵館、一九七五年）二五二―二五六頁参照。特に『婆沙論』の「轉壽異熟業、招富異熟果。」と真諦訳『俱舍論』の「転生寿命」という表現に注目する。
- (5) 『望月仏教大辞典』第一巻・三一五a―b、望月信亨『浄土教の起源及発達』（山喜房佛書林、一九六九年）一九六一―二〇九頁、望月信亨『仏教経典成立史論』（法蔵館、一九七八年）三九三―四〇九頁参照。
- (6) 『大周刊定衆経目録』巻第一五「偽経目録」（『大正』五五・四七四a）

- (7) 『四天王経』（『大正』一五・一一八a—b）
- (8) 『アジア歴史事典』第八卷（平凡社、一九六一年）二七八頁参照。
- (9) 『抱朴子』は王明『抱朴子内篇校釈（増訂本）』（中華書局、一九八五年）を底本とした。『抱朴子』内篇第六微旨一—二五頁、石島快隆『抱朴子』（岩波書店、一九九七年）一一五—一二六頁参照。
- (10) 『抱朴子』内篇第六微旨一—二七頁、石島快隆『抱朴子』一一八—一九頁
- (11) 以上までが望月氏による研究を整理したものである。また藤堂恭俊・牧田諦亮『浄土仏教の思想』第四卷『曇鸞・道綽』（講談社、一九九五年）一〇二—一〇七頁参照。諸橋轍次『大漢和辞典』（大修館書店、一九七六年の「延年益寿」の項目には、「宋玉、高唐賦）九竅通<sub>レ</sub>鬱、精神察<sub>レ</sub>滯、延年益寿千萬歳。（漢書、李尋傳）宜急改<sub>レ</sub>元易<sub>レ</sub>號、廼得<sub>レ</sub>延年益<sub>レ</sub>壽、皇子生、災異息<sub>レ</sub>矣。」（巻四・六四七a）と述べている。また「益寿薬」の項目には、「（史記、淮南衡山王傳）汝何求、曰、願請<sub>三</sub>延年益壽藥<sub>一</sub>」（巻八・一一〇b）と述べ、さまざまな中国の典籍の中で「延年益寿」の語が用いられている。
- (12) 香川孝雄『浄土教の成立史的研究』（山喜房佛書林、一九九三年）三〇五—三二九頁、塚本善隆『塚本善隆著作集』第二卷『北朝仏教史研究』（大東出版社、一九七四年）、四三九—四四〇頁、藤堂恭俊『無量寿経論註の研究』（仏教文化研究所、一九五八年）一—二七頁、藤堂恭俊・牧田諦亮『浄土仏教の思想』第四卷『曇鸞・道綽』一〇二—一〇七頁参照。
- (13) 『無量寿経』巻下（『浄全』一・二七、『大正』一二・二七五c）ここは四十八願中の第十五、眷属長寿の願（『浄全』一・一七）と関連している。同本異訳の『阿弥陀三耶三仏薩樓仏壇過度人道経』（『大正』一二・三一三b）・『無量清浄平等覚経』（『大正』一二・二九五a—b）にも同様の記述が見られる。

- (14) 他に『無量寿経』では「三毒五惡段」において、「長生」・「長寿」・「上天」等の語によって寿命を延ばす功能について言及している。
- (15) 『大智度論』卷第一七(『大正』二五・一八七b—c)
- (16) この「頂禪」という語に関して、浄土宗の七祖聖上人(一三四一—一四二〇)の『伝通記釋鈔』卷第一二には、「觀練熏修」の「修」を次のように注釈している。「修者、超越三昧也。近遠超入、近遠超出、近遠超住。此禪最頂、名爲三頂禪。於三諸法門、自在出入。」(『浄全』三・二九三a)
- (17) 鳩摩羅什訳『妙法蓮華経』卷第六(『大正』九・五一a) またその後、「得聞此經、六根清淨。神通力故、增益壽命、復爲諸人、廣說是經。」(『大正』九・五二b)と偈誦で説かれている。同本異訳の闍那幅多・笈多訳『添品妙法蓮華経』卷第六(『大正』九・一八五a、六〇一年訳出)にも同様の記述が見られる。
- (18) 『涅槃経』卷第三六(『大正』一二・五七九b—c) 同本異訳の劉宋の慧嚴訳『大般涅槃経』卷第三三(『大正』一二・八二六c—八二七a、四三六年訳出)にも同様の記述が見られる。
- (19) 『大集経』卷第三二(『大正』一三・二二〇b)
- (20) たとえば那連提耶舍訳『大集経』(五八四年訳出)卷三六「日藏分」(『大正』一三・二四六a—b)、卷第四〇「日藏分」(『大正』一三・二六八a)、卷第五七「須弥藏分」(『大正』一三・三八七b—c)、『七仏所説神呪経』卷第二(『大正』二二・五四九c)等に見られる。
- (21) 『華嚴経』卷第一八(『大正』九・五二三a—b) 同本異訳の実叉難陀訳『大方広仏華嚴経』(八十華嚴)六九五—六九九年訳出)卷第二七「十迴向品」(『大正』一〇・一四九b—c)にも同様の記述が見られる。
- (22) 『安樂集』卷下(『浄全』一・六九八a)



(23) このことに關して、良忠の『安樂集私記』卷下では「第三問答、明延年益壽問、惟無經云念佛持戒生第三炎天、不言延年。答、二鬼既去。何無延年。」(『浄全』一・七三九a)と述べている。

(24) 『安樂集』卷下(『浄全』一・六九八a—b)

(25) 『安樂集』引用の『譬喻經』については、『経律異相』卷第三七優婆塞部(『大正』五三・二〇一b、五一六年成立)に引用している『雜譬喻經』の文とその内容構成が一致している(道綽による改変)と指摘されている。大内文雄「安樂集に引用された所謂疑偽經典について—特に惟無三昧經・浄度菩薩經を中心として—」(『大谷学报』第五三卷第二号、一九七三年)

(26) 大内文雄前掲論文参照。

(27) 『浄度三昧經』が「往生經」としての性格を有していないことは、すでに齊藤隆信氏によって明らかにされている。齊藤隆信「『浄度三昧經』の研究—『安樂集』と『觀念法門』の場合—」(『佛教大学総合研究所紀要』第三卷、一九九六年)参照。

(28) 『觀念法門』(『浄全』四・二二七b)

(29) 良忠は『觀念法門私記』卷下(『浄全』四・二五八b)で「九横」に關して、安世高訳と伝えられる『仏説九横經』(『大正』二・八八三a—b)の説示を引用している。『仏説九横經』の同本異訳としては、同じく安世高訳『仏説七処三觀經』(『大正』二・八八〇b—八八一a)の文が類似している。またこの『觀念法門私記』に説かれる「選択伝弘決疑鈔」巻第五(『浄全』七・三三八a—b、以下「決疑鈔」と略す)では玄奘訳『薬師瑠璃光如来本願功德經』(『大正』一四・四一六a)を引用して「九横」について説明している。

(30) 『觀念法門』(『浄全』四・二二九b—二三〇a)

- (31) 『淨度三昧經』は『觀念法門』（『淨全』四・二二九c）の中で引用されている。また『七寺古逸經典研究叢書』第二卷『中國撰述經典（其之二）』（大東出版社、一九九六年）所収『淨度三昧經』卷二には「增壽益算」（四七頁六三行目）や「長命得長命」（五三頁一三八行目）の語が見え、長命増上縁の思想的素材を明かしている。
- (32) 『統高僧伝』卷第二〇（『大正』五〇・五九三c）
- (33) 『往生論註』卷下（『淨全』一・二二九a）
- (34) 註（4）でも指摘したように、真諦訳『俱舍釈論』の「転生寿命」という表現は略せば「転寿」にもなりうる。しかも『大智度論』や『婆沙論』と同じ内容を述べている所である。善導はこのような真諦訳『俱舍釈論』の説示も踏まえて、「転寿」という語を使用したのであろう。
- (35) 『妙法蓮華經文句』卷第十下（『大正』三四・一四五a）
- (36) 『釈禪波羅蜜次第法門』卷第十（『大正』四六・五四六b）
- (37) 『釈禪波羅蜜次第法門』はもともと『大智度論』の思想を基本に禪觀の実践法を体系的に述べているものと言われている。『大藏經解説大辞典』（雄山閣、一九九八年）五六〇―五六一頁参照。
- (38) 『決定往生集』卷下（『淨全』一五・四九六a）
- (39) 『選択集』（『浄土宗聖典』第三卷・八三頁）法然は善導の『觀念法門』を引用して、「又云除<sup>ク</sup>入<sup>レ</sup>三<sup>ノ</sup>昧<sup>ノ</sup>道<sup>ノ</sup>場<sup>ニ</sup> 日<sup>ニ</sup>別<sup>ニ</sup>念<sup>ス</sup>彌<sup>ス</sup>陀<sup>ヲ</sup>佛<sup>ヲ</sup>一<sup>ヲ</sup>萬<sup>ヲ</sup>畢<sup>ス</sup>命<sup>ス</sup>相<sup>ス</sup>續<sup>ス</sup>者<sup>ハ</sup>、即<sup>リ</sup>蒙<sup>リ</sup>彌<sup>ス</sup>陀<sup>ノ</sup>加<sup>フ</sup>念<sup>ヲ</sup>、得<sup>テ</sup>除<sup>ク</sup>罪<sup>ノ</sup>障<sup>ヲ</sup>。又蒙<sup>テ</sup>佛<sup>ト</sup>與<sup>フ</sup>聖<sup>ニ</sup>衆<sup>ニ</sup>常<sup>ニ</sup>來<sup>テ</sup>護<sup>ル</sup>念<sup>上</sup>。既<sup>ニ</sup>蒙<sup>レ</sup>護<sup>レ</sup>念<sup>ヲ</sup>、即<sup>チ</sup>得<sup>テ</sup>延<sup>ス</sup>年<sup>ヲ</sup>轉<sup>ス</sup>壽<sup>ヲ</sup>。」とほぼ同様に述べるが、後に続く「長命安樂」の語を抜く。ここから法然は長命安樂を得ることは往生した後と考へ、この語を抜いたと考えられる。
- (40) 『逆修說法』（『昭和<sup>ニ</sup>新修<sup>ス</sup>法然上人全集』（以下『昭法全』と略す）二四九―二五〇頁）

(41) 善導は『観無量寿経疏』（以下『観経疏』と略す）序分義では「食能延<sub>レ</sub>命<sub>フ</sub>」（『浄全』二・二二a）と述べて、食事は命を延ばすことができると説いている。

(42) 善導は『観経疏』序分義では「言<sub>ハ</sub>慈心不殺<sub>ト</sub>者、此明<sub>ニ</sub>一切衆生皆以<sub>レ</sub>命爲<sub>レ</sub>本<sub>ト</sub>。若見<sub>ニ</sub>惡縁<sub>ヲ</sub>、怖走<sub>リ</sub>藏避<sub>ル</sub>者、但爲<sub>レ</sub>護<sub>ル</sub>命也。經云、一切諸衆生無<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>愛<sub>ニ</sub>壽命<sub>ト</sub>。勿<sub>レ</sub>殺<sub>シ</sub>、勿<sub>レ</sub>行<sub>レ</sub>杖<sub>ヲ</sub>、恕<sub>レ</sub>己可<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>喩<sub>ト</sub>。即爲<sub>レ</sub>證也。言<sub>ハ</sub>修十善業<sub>ト</sub>者、此明<sub>ニ</sub>十惡之中<sub>ニ</sub>殺業最惡<sub>ナリ</sub>。故列<sub>レ</sub>之在<sub>ニ</sub>初十善之中<sub>ニ</sub>長命最善<sub>ナリ</sub>。故以<sub>レ</sub>之相對<sub>ス</sub>也。」（『浄全』二・三一a）と述べ、「慈心不殺」の解釈の中で衆生は命を根本としているという。また「修十善業」の解釈の中で、十悪中の殺生の業は最悪として十善の最初に不殺生を置いて、長命の最善行であるとしている。また散善義では「一明<sub>ニ</sub>慈心不殺<sub>ヲ</sub>。然殺業有<sub>ニ</sub>多種<sub>ト</sub>。或有<sub>ニ</sub>口殺<sub>ト</sub>、或有<sub>ニ</sub>身殺<sub>ト</sub>、或有<sub>ニ</sub>心殺<sub>ト</sub>。言<sub>ハ</sub>口殺<sub>ト</sub>者、處分許可<sub>ス</sub>名爲<sub>ニ</sub>口殺<sub>ト</sub>。言<sub>ハ</sub>身殺<sub>ト</sub>者、動<sub>シ</sub>身手等<sub>ヲ</sub>指授<sub>ス</sub>名爲<sub>ニ</sub>身殺<sub>ト</sub>。言<sub>ハ</sub>心殺<sub>ト</sub>者、思<sub>ニ</sub>念方便<sub>ヲ</sub>計校<sub>ス</sub>等名爲<sub>ニ</sub>心殺<sub>ト</sub>。若論<sub>セ</sub>殺業<sub>ニ</sub>不簡<sub>ニ</sub>四生<sub>ヲ</sub>、皆能招<sub>レ</sub>罪<sub>ヲ</sub>、障<sub>レ</sub>生<sub>ニ</sub>淨土<sub>ト</sub>。但於<sub>ニ</sub>一切生命<sub>ニ</sub>起<sub>ハ</sub>於慈心<sub>ヲ</sub>者、即是施<sub>ニ</sub>一切衆生壽命安樂<sub>ヲ</sub>。亦是最上勝妙<sub>ノ</sub>戒也。」（『浄全』二・六一a）と述べ、身口意の三業による殺生を挙げる。この殺生の業は罪を招いて浄土往生の障りとなる。反対に一切の生命において慈しみの心を起こすならば、つまり不殺生戒を持つならば、一切衆生に壽命安樂を施すことになる。したがって善導は不殺生戒を最上の勝れた戒とする。法然はこのような善導の説示を踏まえて述べているのであろう。

(43) 「浄土宗略抄」（『昭法全』六〇四—六〇五頁）

(44) 「念仏往生義」（『昭法全』六九一—六九二頁）

(45) 良忠の『決疑鈔』巻第五では、「轉壽是護念利益也。…（略）…莫<sub>レ</sub>言<sub>ハ</sub>、西方<sub>ノ</sub>行者祈<sub>ニ</sub>願<sub>ス</sub>現世長壽<sub>ヲ</sub>。」（『浄全』七・三三九b）と述べている。ここでは「転壽」は阿弥陀仏の護念の利益とする。また言うまでもなく西方の行者は念仏を称えているので、現世の長寿を祈願しなくても長寿を得ると説いている。